

# シリーズ ふるさと再発見

岩室は、遠い昔からさまざまな歴史を生み出しました。そのふるさとの歴史を紹介していくページです。

その27

■ 月の「ふるさと再発見」シリーズ第二十七回の今回は、大正期に間瀬村民共同の力で開設された「間瀬村立病院」とそこへ招かれた青年坪井清治郎医師の活躍についてご紹介しましょう。

山にかかるために遠く山道をこえて通わねばならないし、夜間の急病の場合など全く処置に窮していました。このようして交通不便な海岸地区にとっては、村内に病院が設置されることは及びもつかない夢のようなものでした。こうした中で、間瀬村民共同の力で、周辺海岸村にはできもしなかった病院を設立し、坪井清治郎医師を招くことができたのは、当時としては画期的な事業でありました。

そして、大正十二年五月、二十九歳の青年坪井清治郎医師が間瀬病院に着任しました。

坪井清治郎医師が間瀬病院に着任してはみたが、まだ病院の建物もなく、出資額五千円での病院設立資金も半分の二千五百円しか集まらず、そこで坪井医師は民間の家で診療をはじめました。でも村人たちにとって当時は、村内に医師がいるそのことだけで大きな安堵感が得られたようでした。

それに、坪井医師は求められれば、隣村の角海や五カ浜村、野横村まで危険な海岸の岩

場道を歩いて往診していました。こうして、間瀬病院と坪井医師は、間瀬村のみでなく隣接海岸村にとても大きな光明がありました。大正十五年、村民の協力による出資で、坪井医師着任三年目にして遂に近代的な間瀬病院の建物が完成しました。でも病院設立当時は、まだ医療器具もとぼしく、手術を要するなどの重病の医療は無理だったようですが、

その後、間瀬病院は、昭和初期の不況の中で経営不振となり、昭和九年間瀬信用購買販売組合により買収され、組合員である村民の出資によって、間瀬診療所として残される事になりました。その後、間瀬病院は、昭和初期の不況の中を退任しました。いよいよ村を離れるその日、村中が休みとなり、村境の峠まで見送りが行われました。それに坪井医師は、村を去るにあたり、村の全戸に梅の苗木一本ずつを贈り謝意を表わしたといいます。

その後、間瀬病院は、昭和初期の不況の中で経営不振となり、昭和九年間瀬信用購買販売組合により買収され、組合員である村民の出資によって、間瀬診療所として残される事になりました。その後、間瀬病院は、昭和初期の不況の中を退任しました。いよいよ村を離れるその日、村中が休みとなり、村境の峠まで見送りが行われました。それに坪井医師は、村を去るにあたり、村の全戸に梅の苗木一本ずつを贈り謝意を表わしたといいます。

# 間瀬病院の開設と坪井医師の活躍

和納小学校の加藤麻美さんが  
見事“優秀賞”に!!

“交通標語”的募集で

皆さん、高速道路巻インター

エンジの出入口にある交通安全塔

を見たことがありますか?これは、

「少しでも交通事故が減少すれば

…」との思いをこめて巻ロータリー

クラブ(会長・野澤政昭さん)で

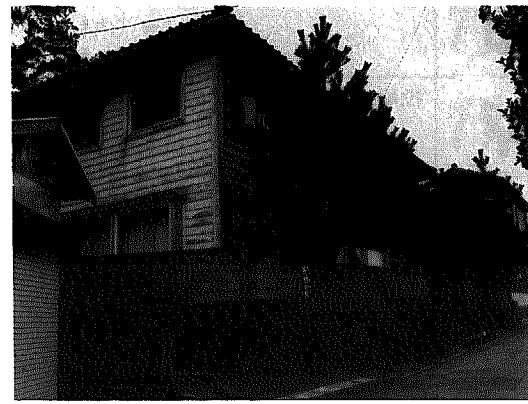
設置したもののです。

今回、その安全塔を掛け換える

木がそここに花を咲かせ、大正末期から昭

和初期にかけて、かつてない不況下の中で仁

木がそここに花を咲かせ、大正末期から昭



▲間瀬村民の協力出資により、大正15年に完成した間瀬病院。当時は村内で完成を祝ったといいます。



今回ご紹介した内容は、「岩室村史」の中から抜粋して掲載したものです。詳しくは、岩室村史をご覧ください。なお、広報いわむらでは、皆さんの地区に伝わる歴史や昔話などがありましたらご紹介したいと思っていましたので、どんどんご応募(役場総務課企画係)

ください。また、本年も村広報活動に皆様からのご理解とご協力を

宣しくお願いします。



▲先月21日、賞状と記念品が手渡された